



第 18 巻の刊行にあたって

東京大学法科大学院ローレビューの意義は、2006年に電子ジャーナル方式で刊行された第1巻の「創刊の辞」の冒頭で、当時の高橋宏志研究科長が謳い、15年余の間、歴代の研究科長がそれぞれ熱を込めて、巻頭言に説いてきたとおりである。すなわち、専門職大学院である法科大学院の任務は、学生が、既存の法規範、既存の法解釈論、既存の実務に習熟し、具体的な問いにつき一義的に答えを導き出せるようにすることに尽きない。法科大学院は、既存の知見では十分な解決が得られない問題を的確に認識し、基本的な考え方に遡り、歴史的・国際的な比較による批判的視点をまじえて、既存の法規範・法解釈論・実務を反省し、さらに、新たに生じる可能性がある問題を展望しながら、新たな知見を創出していく場でなければならない。東京大学が、こうした法科大学院の理念を最も鮮明に体现する成果が、ローレビューである。

ローレビューの意義は、デジタル情報技術が急速に発展する社会において、ますます重くなっている。現在、多くの人々にとって大量の情報を即時に取得することが容易になり、人間が行ってきた判断やコミュニケーションが、アルゴリズムにより代替されることが増えている。こうした傾向は、今年に入り急速に普及した生成AIにより、さらに加速した。法律家には、他に代替できない論証と議論を行うことが求められている。こうした役割を果たせなければ、法律家は存在意義を発揮できず、社会的信用を失うであろう。今やローレビューは、法律家の役割と存在意義を顕かにする意味を持つといっても過言ではない。

第18巻となる本ローレビューには、学生諸氏から7編の論文が投稿され、うち4編が掲載された。厳しい審査を経て本誌に論文が掲載された学生諸氏に対し、卓抜を讃えたい。もともと、数の上では、投稿が例年に比して低調であった。多数の論文が執筆・投稿されることによって、法科大学院の上記の理念が実現され、また、ローレビューの質の向上に資する。今後、学生諸氏からの投稿数が復調することを期待したい。教員からは、3編の投稿をいただき、ローレビューに深みが与えられた。ここに、論文を投稿されたすべての教員および学生諸氏に対し、感謝申し上げます。

さらに、編集委員の学生諸氏には、投稿論文の全体構想から一言一句に至るまで、緻密な調査に基づき審査検討をしていただいた。その際には、専門分野の教員から貴重なご意見をお寄せいただいている。編集のプロセスについては、コロナ禍以前のスタイルに戻す途上にある。加えて、今年度から司法試験の在学中受験の制度が導入され、試験時期が遅くなったため、編集作業のスケジュールがタイトになった。こうした中で編集作業を進められた委員の諸氏にお礼を申し上げ、本巻を世に送り出すこととする。

2023年12月

東京大学大学院法学政治学研究科長
山本隆司

東京大学法科大学院ローレビュー第18巻には、投稿締切日である2023年3月24日までに、7編の学生論稿の投稿がありました。これらの論稿の中から、第18期編集委員会は、掲載論稿として4編を選出いたしました。

たくさんのご投稿をいただき、誠にありがとうございました。

第18期編集委員会